
東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

幻想郷の住人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

【Nコード】

N6698Z

【作者名】

幻想郷の住人

【あらすじ】

高校受験に失敗した”天崎 流音”と”高宮 柊”が入った学校。

それは私立幻想学園。

この学園で高校生活をする事になった！！

様々な種族が通うこの学校に二人はついて行けるのか！？

学園生活の始まり（前書き）

どうも、幻想郷の住人です。

今回は『学園生活』を題材にしてみました。

設定を考えるだけで3日掛かった……………。

そんな事は置いといて、この作品をお楽しみ下さい。

第1話、行ってみよう！！

学園生活の始まり

人々が巨大な板の前で騒いで集まっている。

今日は有名高校の合格者発表の日だ。

ある人は笑っていて、ある人は泣いている。

その人の表情が、その人の受験の結果だと思う………多分。

「あちゃー……落ちちゃったか」

だが私の場合は落ちても笑っていた。

私の名前は”天崎あまさき 流音りゅうね”。

中学は卒業出来たけど、高校受験に失敗した一人暮らしのかわいそうな美少女。

まあ美少女って言ってもオタクだから多分プラマイ0だね。

さて私は受験に失敗した訳なんだが別に気にしてはいない。

まあ有名なところって色々面倒だからね。

「やっぱり落ちたみたいだな……。まあいいや」

隣にいるのは私の幼なじみである”高宮たかみや 柁まさき”。

受験に失敗した一人暮らしの男。

彼も受験に失敗した事を特に気にしてないようだ。

「枉。一緒に帰ろ」

「ああ、いいよ」

（よし、枉捕獲！！）

私は心の中でガッツポーズしてから学校の門を出た。

私達は家へと歩いていく。

「ねえ。 裏道通らない？」

「裏道？」

「そ。 少し探検したいから良いよね？」

「わかった」

「あ、ここを曲がってつと……」

私は道を曲がって、柵を裏道へ連れていく。

しかし

ドンッ！！

「あたっ」

「きゃっ」

そこで誰かとぶつかった。

私はぶつかった人を見て、誤ろうとしたが声が出なかった。

目の前に居たのはとても美しい美女だったからだ。

「ん？ どうかした？」

「あ、……………怪我はありませんか？」

「私は大丈夫。貴方は？」

「大丈夫です」

「そう。なら良かったわ……………貴方は天崎流音さん。そして後ろに居るのは高宮柁君……………で合ってるかしら？」

「「！？」」

私と柁は名前を言い当てられてびっくりしてしまった。

見知らぬ人に名前を言われたらそりゃ驚くだろう。

「何故、俺達の名前を？」

「まあ企業機密ね。それより貴方達に渡したい物があるの」

「……………学園への招待状？」

「ええ。貴方達二人を私の学園に招待したいの。私は八雲 紫。よろしくね」

「でもなんで私たちなんですか？ 他に優秀な人がいるのに……………」

「二人には凄い才能があると思ったからよ。勉強とかは関係無くてね」

紫さんはそう言った。

私は胡散臭いと思って断ろうとして柎の方を見た。

そして柎は信じられない事を言った。

「……………わかりました。行きましょう」

「柎！？ いいの！？ あっさり承諾しちゃって!？」

「とりあえず学校に行けるんだ。俺は行きたいと思う」

「……………」

「流音さんはどうする？」

「……………柎が心配だから行くわ」

「そう。ありがとうね。学園へのと学園内の地図を渡しておくわ」

紫さんは私達に地図を渡してくれた。

「ありがとうございます」

「それじゃあ4月に会いましょう」

「はい」

「言い忘れてたけど私の学園は去年まで女子校で、今年から共学になったから男子はかなり少ないからね」

「「…………え？」」

「じゃあね」

紫さんはそう言って、歩いていった。

「……………」

「…………不思議な人ね」

「…………急いで帰ろう」

「うん」

私と柁は家へと走った。

紫さんと会ってから二ヶ月経った。

私と柁は渡された地図を頼りに学園を目指している。

完全寮生活らしいから、荷物を山ほど持って学園へむかうから辛い。

しかも歩いている道は山道のような道でさらに辛さが増す。

「はあ……はあ……もうすぐだね」

「ああ、もうすぐ見えてくるはずだ」

「……もしかしてあれ？」

「……そうじゃないか？」

目の前にあるのは中々綺麗な校舎。

その学校の名前は『私立幻想学園』。

何が幻想なんだろうか……。

そんなことを考えてる内に紫さんが出迎えてくれた。

「ようこそ、流音さん。柁さん。私立幻想学園へ」

「……疲れましたよ」

「とりあえず荷物を寮に運びたいんですが……」

「わかったわ。藍、二人を案内してあげなさい」

「わかりました」

そこに現れたのはこれまた綺麗な人だった。

綺麗なのは良いんだけど……狐っぽい尻尾が生えてる。

しかも9本。

狐っぽい尻尾が9本って事はもしかして……

「九尾？」

「当たり前だな。私は九尾の妖怪で紫様の世話役兼数学教師をしている八雲藍だ。よろしく」

「よろしくお願いします……って妖怪!？」

「ん？ 妖怪を見るのは初めてか？」

「はい。でも俺達、妖怪について調べたりしてたので名前ぐらいならわかります」

「んー!! 九尾に会えたから私はもう死んでも良いや!!」

私はテンションが上がっていた。

某忍者漫画に出てきた妖怪でもある九尾に会えたから当然だろう。

「おいおい。大袈裟すぎないか？」

「いやいや!! これぐらいの反応はしますって」

「あんまりはしゃぐなよ。流音」

「はゝい!!」

「さてと寮に案内しようか」

「またね」

紫が見送る中、私と柊は藍さんについていった。

私達は今、呆然している。

「ここが……寮？」

「ああ、そうだが？」

「デカすぎでしょう？ この寮は」

目の前に建っている寮を例えるなら渋谷一等地に建っている高級マンションだ。

まあ一等地の値段は知らないけど。

「流音の部屋は5階の508室。柁は5階の509室。これはその部屋の鍵だ」

「ありがとうございます」

「なんか高級ホテルっぽいなあ……」

「上がる時は階段か、そこの昇降機を使ってくれ」

「わかりました」

「始業式は明日だ。それまでゆっくりしているといい」

「はい」

「それでは私はこれで」

藍さんは校舎の方へ歩いていった。

「さてと部屋に行きますか」

「そうだな」

「とりあえず早く部屋みたいから急ごうよ!」

「わかった」

私と柁は荷物を持って昇降機に乗り込んだ。

（よし!! チャンス!!）

私は柁とくつつくためにわざと詰めた。

「なあ流音」

「何?」

「少しくつつき過ぎじゃないか?」

「いいの、いいの」

「……………まあ荷物が多し、いいか」

柁は照れたりせずになんと言った。

全く……… 柩は鈍感なんだから………。

ポーン!!

「あ、着いたみたい」

「さて……… 降りよう」

柩は荷物を持って降りた。

「待つてよ」

私もそれに遅れて降りる。

「えーっと……… 508、508、508……… あったあった」

「俺はその隣だから見つけるのは簡単だな」

「とりあえず荷物を片付けたら柩の部屋に行くからよろしくね」

「りょーかい」

私は自分の部屋に入った。

そして入った瞬間の一言は

「うわおー!!」

だった。

どこかのホテルにあるスイートルームのような部屋だったからだ。

実際、スイートルームなんて入った事無いけどさ。

少なくとも番組で見たよりは豪華だ。

大きなソファが2つ、大きなベットが1つ、大画面テレビが1つ……
………凄っ！！

一人暮らしには勿体ないなあ……。

おっ……と早く荷物を整理して柁の部屋に行かないと。

「荷物をさっさと整理しよっ」と

私は荷物を整理し始めた。

学園生活の始まり（後書き）

意見、感想、その他諸々、お待ちしております。

新しい友達と夕飯（前書き）

はい、どうも。

今回は二人に初めての友達が出来まゝす。

第2話行ってみよう。

新しい友達と夕飯

パンツ！！　パンツ！！

「大体、こんな感じで良いよね？」

私は家具やら何やらを綺麗な感じに配置した後、手をはたいた。

これで桎がいつ来ても大丈夫だね。

「さて、桎の部屋に行こう」と

私はルンルン気分で、部屋を出た。

そして隣の部屋に行ってインターホンを鳴らす。

ピンポン！！

「桎。居る？」

ガチャ！！

「流音。遅かったな」

「ちょっとだけ時間がかかったんだ。中に入っているよね？」

「良いよ」

「わーい」

私は柁の部屋に入った。

入ってすぐに私と柁の部屋に違いが見つかった。

「あれ？ 私の部屋と違うみたい？」

「そうなのか？」

「私の部屋は洋風だったけど、柁の部屋は和風なの」

「へえ。部屋によって違うのかな？」

「そうじゃない？」

「で、学園の地図を見ながら散策するか？ 校内を一通り見ておきたいし」

「良いよ。……でも案内してくれる人が居たら楽なんだけどね」

私がそう言った瞬間、

ピンポンー！！

インターホンが鳴った。

「はい。誰ですか？」

「あ、510室の者です。挨拶に来ました」

「今行きます」

柩は扉に向かっていった。

私もその後ろについていく。

ガチャ！！

扉を開けると白髪の小さな女の子がいた。

その女の子の腰には刀を入れる鞘があった。

レプリカかな？

「はじめまして。私、中学3年生の魂魄妖夢と申します」

「俺は高校1年生の高宮 柩。よろしく」

「で、後ろの方は508室の人ですか？」

「うん。私も高校1年生の天崎 流音。よろしくね。妖夢」

「よろしくお願いします」

妖夢がそう言った後、別の声が聞こえた。

「妖夢さ〜ん。流音さん見た〜？ 部屋に反応が無いんですけど」

「居ましたよ。柩さんの部屋です」

「わかった。おつ……と。はじめまして。507室の高校1東風谷早苗です」

今度は緑の髪をした女の子だった。

……………胸でかいなあ。

「高宮柁だ」

「天崎流音です」

「これから予定があったりしますか？」

「これから学園を回ろうかって思ってるけど……」

「あ、ちょうど良かったです。案内して差し上げようって早苗さんと相談してたんですよ」

「ラッキー！！ 誰かに案内して欲しいなって考えてたんだよね。いやー助かるな」

「それじゃあ行きますか？」

「流音。行くとするか？」

「行こう！！ 行こう！！」

「それじゃあ行きましょう」

私達は妖夢と早苗に学園を案内して貰う事になった。

日が暮れる頃、寮のロビーに戻ってきた。

「これで寮以外は一通り案内しましたが、質問とかはありますか？」

「無し」

「流音に同じ」

「さて、最後は寮の食堂に行きましょう」

「はい」

「わかった」

「それでは8階へ向かうとしましょう」

「1階はロビーで2階から7階が生徒の自室、8階は食堂、9階は先生の部屋なんです」

「へー。そうなんだ」

「昇降機が来たよ」

私達は昇降機に乗り込んだ。

「食堂ってどんな感じ？」

「結構美味しいよ。それに綺麗だし」

「ちなみに部屋の電話から食堂に掛けて、部屋への宅配サービスも出来るよ」

「便利だな」

「で、どうする？ 今日食堂か、宅配か」

「せっかく食堂に行くんだから食堂で食べるよ」

「じゃあ私達と食べましょうか」

「うん」

「良いですよ」

「わかった」

ポーン！！

昇降機が7階で止まった。

「あ、誰か乗ってきますよ」

入ってきたのは緑の髪をした美人さんだった。

「ん？ 見ない顔ね？」

「私、今日から転入してきた高校1年生の天崎流音です」

「同じく高宮柊です」

「私は風見幽香。高校2年生よ」

「幽香さんも食堂に行くんですか？」

「そうだけど……貴方達もそうなの？」

「はい。案内ついでに食事をしようと」

「幽香さんもどうですか？」

「今回はパス。勉強しながら食べるからね」

幽香さんは教材を見せてそう言った。

「そうですか……また次回に食べましょう」

「そうね」

ポーン！！

「あ、着きましたね」

「じゃあ降りましょうか」

「はい」

「ああ」

私達は昇降機から降りた。

そして食堂の中に入る。

「じゃあ私はここで」

「あ、はい。……………それにしても賑やかあ……………」

「……………そうだな」

私は入った途端に言葉を漏らした。

丸い形のグループテーブル、個人席、和風の席……色々と席に種類があった。

生徒達は席に座り雑談したり、勉強したりしている。

「あそこに座りましょう」

「そうだね」

「このメニューに和の料理つてあるのか？」

「和・洋・中……全部ありますよ」

「そうか。安心した」

私達はグループ席に座った。

そして早苗からメニュー表を渡される。

「何を食べますか？」

「俺はヒレカツ定食だな」

「私は……日替わりにしよう」と

「私はいつも通りに和風定食で」

「じゃあ今日は私も和風定食にしよう」

早苗はメニュー表を片付け、券を渡してくれた。

「これを渡せば料理をもらえるからね」

「……お金いらないの？」

「まあね。学費の中にその分が入ってるみたいだし」

「なるほど。色々と便利なシステムかもしれないな」

「あ、誰が席番する？」

「俺がやろう」

「わかった。少し待っててね」

私達は桎を置いてご飯を取りに行った。

そして並ぶとすぐに早苗と妖夢が話し掛けてきた。

「ねえ、流音さん」

「なあに？」

「もしかして桎さんの事、好きですか？」

「な、な、な、何を言ってるの！？　べ、別に桎の事なんて……」

「焦ってるのばれてますよ」

「むうー……」

「でも柁さんって和風の大人しい人ですよね」

「……………まあね。でも柁はスイッチが入ると暴走するんだよね。今は仲良くなるまで大人しいだけだよ」

「スイッチ？　どんな？」

「秘密。でもいずれ分かんと思うよ」

「わかったわ。楽しみに待つとしようっと」

「あ、順番みたいです。流音さん、券を渡して下さい」

「はい」

私は食堂の人に券を渡した。

なんか料理してる人、メイド服着てる。

それになんか羽生えてる……………。

ま、いつか。

「お待ちどうさま」

「はい」

私の料理がもう出てきた。

仕事早いなあ。」

さて、早く戻って柁とバトンタッチしなきゃね。

タタタ……………。

「柁。交代。」

「わかったよ。」

「早くね。」

「善処するさ。」

柁は列に並んだ。

そしてすぐに早苗達 came。

「お待たせしました。」

「柁さんが来るまで待ちますか？」

「そうしょつか。」

私達は柁を待つ事にした。

「で、さっきの話の続きなんだけど……………」

「何？」

「柁さんとはいつからの付き合いなんですか？」

「幼稚園からだね。家も近いしよく遊んでたよ」

「そうなんだ。ちなみに柁さんの良いところは？」

「どんなに大変な時でも私を心配してくれるし、しっかりと話を聞いてくれるし、他にも……………」

「あ、もう良いです。柁さんが来そうなんで」

「え？ うん。わかった」

良いところを途中で止めた。

まあ柁がこっちに歩いてきてるからね。

……まだ言い足りないなあ。

「待たせてすまない」

「大丈夫ですよ」

「それじゃあ食べるとしましょうか」

「そうだね」

「わかった」

「……いただきます!!」「」「」

私達はみんなで仲良く食事を始めた。

新しい友達と夕飯（後書き）

意見、感想、その他諸々お待ちしております。

早苗の先読みと秘密の会話？（前書き）

はい。

どうも。

今回はパソコンを使います。

え？

幻想郷にパソコンは普及してない？

まあしてませんが、今回の話はパソコンを普及させてみました。

それでは第3話行ってみよう。

早苗の先読みと秘密の会話？

私達のご飯を食べ終わって部屋に戻っている。

「あゝ、美味しかった。学食の味を超してるね」

「ああ。中々の味だった」

「明日はどうします？ 始業式の後には教室に行って、先生の話聞く事になりますか」

「その後は……何をしよう……」

「多分、流音さんと柁さんは特殊能力を調べる事になりますね」

「特殊能力！？ 本当に！？」

私はテンションが上がった。

だって特殊能力って憧れるじゃない！！

「ちなみに私達も持ってますよ。私は剣術を扱う程度の能力です」

「私は奇跡を起こす程度の能力です」

「カッコイイなあゝ！！ そっいえば幽香さんにも能力があるんですか？」

「花を操る程度の能力ですね。あの人は花がとても好きなんですよ」

「平和な能力ですね」

「明日が楽しみだあ!!」

「さて部屋に戻りましょうか。明日の準備がありますし」

「わかった」

「はい」

「わかりました」

「それでは」

私達はそれぞれの部屋に入っていった。

ボタン

「ふう……今日は色々楽しかったなあ……」

私は一日を思い返してそう思った。

九尾に会った事、友達が出来た事……色々あった。

この学園は今まで見てきた学園よりも楽しい。

この学園に入れてよかった。

紫さんに会えてよかった。

柁と来れてよかった。

本気でそう思う。

「さてと明日の準備しないと……」

私は明日、必要な荷物をバックに入れてく。

筆箱、生徒手帳、地図、時計、メモ帳、あとお守りつと。

よし、準備完了。

「とりあえず暇だからパソコンでもやろつと」

私はソファに座り、ノートパソコンを起動。

そしてインターネットエクスプローラーを選択した。

「ネット繋がるかな？ ……………よし、繋がった。……………ん？
なにこれ？」

私がネットに繋いだ直後、メールが届いた。

宛先は……” YUKARIYAKUMO@901-PRINCIPAL”……もしかして紫さん？

「何々？ ……………」

”明日、教室でのホームルームが終わったら校長室に来て。貴方と柁くんに渡したい物があるわ”

「……………渡したい物？」

紫さんのメールを読んで少し考え込んだ。

（渡したい物？ もしかして能力？ それだったら嬉しいな。ま、明日の楽しみにしておこうと）

「”了解しました”……つと。返信!!」

私はメールを返信した。

そして改めてネットをやろうとした時、大変な事に気がついた。

「あれ？ 紫さん、なんで私のメアド知ってるの!？」

私は紫さんにメアドを教えてない。

なのに紫さんからメールが届いた。

何故？

個人情報流出？

もしかしてヤバイ？

「……とりあえず明日、紫さんに聞いてみよう」

私は気を取り直してパソコンを弄り始めた。

しかしまたメールが来た。

「……今度は何？」

宛先は”S A N A E K O C H I Y A @ 5 0 7 - H S 0 1”。

早苗からだ。

なんで早苗まで私のメアドを……。

”こんばんは。おそらくメアドを教えてない人からメールが来て驚いていますよね？”

「もちろん。めちゃくちゃ怖いよ」

”その事について説明を。まずネットに繋ぐと学園のサーバーにパソコンが登録されます”

「そうなのか。って、勝手に登録されるんだね」

”学園のサーバーに登録されたらパソコンに学園内専用のメアドが

登録され、使用する事が出来るんです。流音さんの学園内専用メールアドレスはこんな感じ。【RYUNE AMASAKI@508-HS01】”

「名前と部屋番号と学年がメアドなんだ」

”ちなみに変更は出来ないみたいです。残念”

「本当に残念。変えたらかつこよくするのになあ……」

”メールを送る場合は普通のメールと変わりません。さて説明はこれぐらいですが質問はありませんか？ 質問があつたらメールして下さいね”

「早苗、感謝。色々ありがとう”……返信つと」

私は早苗に返信した。

よかった……個人情報流出じゃなかった。

「あ、返信が来た」

”どういたしまして。そういえば流音さんに聞きたい事があるんですけど良いですか？”

「……………」”可能な限りなら良いよ” っと

”柎さんの例のスイッチ教えて下さい”

ドテッ！！

「……なんで今それ？」私、秘密って言わなかったっけ？」

”言ってましたけど……物凄いい気になります”

「誰にも言わないなら良いけど……聞く？」

”お願いしますm(_____)m”

早苗……顔文字入れてきたんだね。

良いと思うよ？

「仕方ないね。柎のスイッチはアニメとかマンガ系の話をする事。

……まあ私もだけど”

”もしかして二人ともオタクなんですか？”

「Yes”

”共通の趣味があればきっと柎さんと付き合う事が出来ますよ”

「ちよつwww。さなwww”

”……wwwってなんですか？”

やっぱりwwwを理解してなかったか。

「笑ってるんだよ。ネット用語みたいな物さ”

”へえ。便利そうですね”

「”まあ結構使うよ”」

”私も今度使ってみよつと”

「”頑張れ”」

私は返信したところで時間を見る。

20：45か。

そろそろ寝る仕度しないと。

”あ、そうそう。21：00から入浴出来ますけど一緒に行きますか？”

「”行く行く。そういえばお風呂場ってどこにあるの？”」

”1階のロビーの裏です”

「”女湯しか無いよね？”」

”男湯もあります”

「”あるんだ”」

”柁さんと一緒に行っても大丈夫ですよwww?”

早苗……もう使いこなしてるっぽい。

「まあ妖夢も連れて行こっか」

”わかりました。ではまた後ほど”

「了解”……………ふう」

私はメールが一通り終わってパソコンを閉じた。

「柩を呼ばないとな」

私はゆっくりと柩の部屋に向かった。

ピンポーン

「はい」

「柩。私だよ」

ガチャ

「なんだ？」

「21:00から入浴時間だから一緒に行かない？ 男湯もあるから」

「わかった。準備をしておこう」

「また後でね」

「ああ」

ボタン

「さてと私も早く準備しないとね」

柩が扉を閉めた後、私は自分の部屋に戻ろうとした。するとちょうど良いタイミングで妖夢がやって来た。

「おや？ 流音さんじゃないですか」

「お、妖夢。この後のお風呂、みんなで行かない？」

「良いですよ」

「それじゃあ21:00に廊下でね」

「わかりました。それでは後ほど」

「うん」

妖夢は自分の部屋に戻った。

「おっと……私も準備しないと」

私も部屋に戻って入浴の仕度を始めた。

「それじゃ行こっか」

「はい」

「おう」

「わかりました」

私達はお風呂場に向かって階段を降り始めた。

「そつえば流音」

「何？ 枉」

「俺のところに紫さんからメールが来たんだが流音のところにも来たか？」

「来たよ。明日の事でしよう?」

「ああ。でもそんな事より何故紫さんが俺達のメアドを知ってるかわかるか?」

どうやら柁は原理を知らないようだ。

（私はさっき早苗から説明があつたから説明出来……………あれ? もしかして早苗に見透かされてた? 柁からこういう質問が来る事を予想して…………）

私は早苗の方を向いた。

グッ!!

早苗は私の方を向いて握り拳に親指を立ててた。

やっぱり見透かされてたようだ。

「柁。原理を説明するとね……………」

私は柁に風呂場までメールとかな説明をしていた。

早苗の先読みと秘密の会話？（後書き）

意見、感想、その他諸々お待ちしております。

流音の襲撃と早苗DM（前書き）

はい。

今回はサービスカットがあります。

本当に難産でした。

それでは第4話行ってみよー。

流音の襲撃と早苗DM

「どう？ わかった？」

「なるほど……中々のシステムだ」

柩は納得したようだ。

ちょうど良い感じで風呂場に着いた。

「あ、着きましたよ」

「それじゃあ柩さんとはここで別れですね」

「ああ、それじゃあ後でな」

「じゃあね」

私達と柩は別れた。

「どんなお風呂かなあ？」

「それは入ってからのお楽しみですよ」

「早く入るとしましょうか」

私達は脱衣所に入った。

「で、荷物はどこに置けば良いの？」

「鍵付きロッカーがありますのでその中に入れて下さい」

「防犯面も大丈夫そうだね」

「どうせだし、隣に荷物入れませんか？」

「良いよ」

「私も構いません」

「じゃあここにしましょう。妖夢さんの刀も入りそうですしね」

早苗は端の方の縦長なロッカーの近くを開けた。

「そうだね」

「さつさと脱ぎましょうか」

「はい」

私達は装甲をどんどんパージしていく。

まあ普通なら服って言うだろう。

だが私の場合は装甲って言うのだ。

理由は装甲って言った方がカッコイイから。

胴部表装甲、脚部表装甲。

さらに裏装甲をパージする。

さてこれで某機動戦士だと骨組みのような状況。

（それにしても早苗の胸、大きいなあ……）

私は妖夢と自分の胸を見てから早苗を見る。

大きいとも小さいとも言えない私の胸。

妖夢は小さいと言い難いが控え目。

早苗は………デカイ。

ええい……こうなったら……。

「どりゃあー!!」

私は背後から飛びつき、早苗の胸を揉む。

「ひゃあっ!?! りゅ、流音さん!?!」

緩衝材が掴んだ私の指を優しく押し返してくる………だと?

柔らか過ぎず、硬すぎないこの絶妙な感触……。

最高級の緩衝材じゃないか。

私にはとても製造出来ない!!

「くっ！！ このけしからん緩衝材、どうやったら製造出来るんだ！？」

「し、知りませんよぉ！！ だ、大体、緩衝材ってなんですかぁ！？」

「衝撃を和らげる素材だ。しかしこの緩衝材は特殊なものか……。よし、終了」

「はぁ……はぁ……りゅ、流音さん！！ いきなり何するんですか！！」

「ごめんね。つい癖でやっちゃうんだ」

「もう……やるにしても見られないところでやって下さいよ……恥ずかしい」

「ははは。まあ、そんな事よりさっさと風呂に入っちゃおうよ」

私はタオルを持って浴場の扉を開けた。

「広い……」

「まあ私も最初はそう思いました。でも実際、これと露天風呂があるんですよ」

「学校に露天風呂って………どんだけ？」

「気にしたら負けです」

「まあ体を洗っちゃいましょうか」

私達はそんな感じな展開から体を洗い始めた。

早苗がボディソープで体洗う姿は刺激的だったので私が襲撃したのは言うまでもない。

チャポン

「温かいねえ」

私達は室内風呂に浸かった。

「全く……なんで流音さんは私を襲うんですか？」

「え？ そりやお嬢ちゃんがおじさんを誘惑したからさ」

「なんかおかしい喋り方してますね？」

「ははは。ほんの軽いジョークだよ」

「むう……冗談にしては目が本気でしたよ……」

「これが私のスイッチ」

「わかりました。これからは流音さんと風呂に入らないようにしますね」

「ご、ごめんなさい！！ 嘘です！！ 冗談です！！ スキンシップのつもりでやっただんです！！」

「はあ……これ以上、他人に見られるところでやったら……流音さんの××に棒をグツサリと刺して奥歯ガタ言わせますからね？」

おそらく早苗は笑顔で言ったのだろう。

しかし私は恐怖して速攻で、風呂の中で土下座した。

「ぶびばべんべびばあ！！」

私は「すみませんでしたあ！！」って言った。

まあ水の中でそんな事をやったらこうなるよね。

「わかればよろしい」

「別に女の子しかいないから見られても良いんじゃない……」

「何か言いましたか？ 流音さん？」

「なんでもないです。すいませんすいませんすいませんすいません」

この闇の早苗を早苗ダークモードと名付けよう。

「今失礼な事を考えませんでしたか？」

「何も考えておりません」

「そうですか。ならそろそろ露天風呂に行きましょう」

「はい」

「わかりました」

私達は露天風呂に出た。

それと同時に体へ外の風が当たる。

「涼しいなあ……」

「ええ、空も綺麗ですし」

「でも早く浸からないと体が冷めますよ」

「はい」

私達は露天風呂に浸かった。

その後、すぐに露天風呂の扉が開いた。

「お、早苗と妖夢じゃん」

「それに見ない顔が一人。転校生かしら」

「霊夢さんに魔理沙さんじゃないですか」

「ああ、こちらは天崎流音さん。今年から高等部に入学する人です」

「私は501室の博麗霊夢。この学校の生徒会長してるわ」

「私は502室の霧雨魔理沙。図書会の部長だ」

「508室、高1の流音です。よろしくお願いします」

「ちなみに私達、あんたと同じ学年だからね」

「へえ、そうなんだ。あ、ちなみにもう一人転校生がいますよ」

「見当たらないけど、どこにいるんだ？」

「男だから男湯にいるよ。あとで待ち合わせしてるから会おう？」

「まあ顔を見ておきたいから一緒に行くわ」

「私もな」

「わかった」

また新たな友達が出来た。

つてか高1が生徒会長？

「普通、高3とかが生徒会長じゃないの？」

「やる人がいないから私がやってるのよ」

「なるほど。そういう事なのか」

「さてとしばらく空を見ながらゆっくりとしましょうか」

「さんせーい」

私達は露天風呂に浸かりながらゆったりした。

「はあゝ気持ちよかった。これが毎日入れるなんて天国だね」

私は浴衣を着て、脱衣所を出た。

なんか風呂上がりは浴衣を着るのがお約束らしい。

制服は基本的に登校してから下校するまでで、他は私服で良いそう
だ。

「ちなみに言い忘れてたけど、ここの温泉は天然だから」

「……マジ？」

「大マジ」

「ま、いつか。さて、柁は居るかな？」

「長湯だったな。……ん？ 二人増えてるようだが新たな友人か？」

柁は浴場の出入口の近くで座って本を読んでいた。

「待たせた？」

「30分ぐらいな」

「早くない？」

「まあな」

「貴方が高宮柁？」

霊夢が柁に話し掛けた。

「ああ、そうだが？」

「私は博麗霊夢。この学校の生徒会長よ」

「私は霧雨魔理沙。図書会の部長だぜ」

「ちなみに俺の自己紹介いるか？」

「まあ流音から大体聞いてるから大丈夫よ」

「だろうな。大体予想はついてた」

「なんで予想出来たの？」

私は結果が見えていたがあえて質問してみた。

「お前の癖で友人の個人情報話すからな」

「やっぱりわかってたか」

「何年幼なじみやってると思ってるんだよ」

「え」と12年ぐらい？」

「正解。俺達は物心がつく前から仲良くしてたんだからお互いの事は分かってるだろ？」

「ま、そうだね」

「……さて、部屋に戻るとしうか」

「はい」

「そうしましょう」

「わかりました」

私達は昇降機に乗り込んだ。

（（（（流音の言う通り、枉って結構鈍感なんだね））））

流音と柁以外、全員そう思ったのはさらに余談だ。

流音の襲撃と早苗DM（後書き）

意見、感想、その他諸々お待ちしてまーす

始業式前夜&学校登校前（前書き）

はい。

更新しました。

では第5話行ってみよう！！

始業式前夜&学校登校前

ポーン！！

私達は昇降機から降りた。

「じゃあね〜」

「またね」

「また明日会おうぜ」

そして霊夢達と別れた。

まあ別れたって言っても部屋近いんだけどね。

「さてと早く寝ないと明日起きれないなあ」

「確かそろそろ配布物がポストに入ってる時間ですね」

「え？ ポストなんてあったっけ？」

「部屋の入口にあります」

「入口ね……… 見てないから後で探してみよつと」

「もう部屋に着いたか。それじゃまた明日」

「じゃあね」

「失礼します」

「それではまた明日」

私達は挨拶をして、それぞれの部屋に入った。

パタン

ガチャリ

扉を閉めて鍵を掛ける。

「ポストがあるって………大体は靴箱とかの上だね」

そして私は部屋に入ってからすぐ、靴箱の上を見た。

やっぱり予想通りの位置にポストがあった。

「あつたあつた。で中身は………紙が少しだけだね」

私はポストの中の紙を取り出した。

明日の始業式の時間・高校1年の時間割・教室の場所………合計3枚が入っている。

私はその紙を持って歩き出そうとした。

「ん？ ……もう一枚入ってる……」

しかしポストの中にまだ紙が入っていたので戻った。

「何々………広報部新聞？」

私はその新聞も持ってリビングに向かった。

「よつと」

私はソファに座った。

そして新聞を開く。

「新聞ってどんな事が書いてあるんだろ……」今日、学園に転校生がやってきた。名前は不詳。だが学園が共学になってから初の男子が入ってきたようだ」

私はここで少しだけ引つかかった。

「ん？ 男子？ もしかして転校生って……私達の事なのかな？……それにしても情報が伝わるの速いな」

今日来たばかりなのにもう私達（仮）の事が書いてあるなんて……一体いつばれたんだろ。

思い当たるのは学園を案内された時かな？

「いやいや。そんな事よりも明日の事を見ておかないと」

私は本来やるべき事を思い出して新聞を机の上に置いた。

そして明日の予定表を確認して携帯型のスケジュール表にメモをしていく。

8：00～8：30 登校↓8：45～講堂で始業式↓9：30 クラスでホームルーム↓終わり次第、柎と校長室へ↓そして下校と。

「午前中で終わりそうだね。良かった良かった」

私はスケジュール表を荷物の中に入れる。

そして浴衣から寝巻へと着替える。

「さて、残りの時間は布団に入りながらパソコンのオンラインゲームでもやってよーっと」

私はパソコンを持って布団の中に入っていく。

ベットには小さなテーブルがついていて小物とかを置けるようになっている。

そこにパソコンを置いて、コードをコンセントと繋ぐ。

そして布団の中に入って、部屋の電気を消す。

「ふっふっふっ……………就寝時間ギリギリまでエンジン全開フルスロットルラン〇ムモードでオンラインゲームをやってやる!!」

パソコンを起動してネットに繋ぎ、オンラインゲームを起動する。

パスワードを入力して早速、遊びに入る。

ちなみに私は就寝時間を過ぎてもゲームに没頭していて、気がついたら夜の2時になっていたのは余談だ。

私の暗闇の意識の中に目覚まし時計の音が鳴り響く。

ピリリリリ…！

「ん……………もう朝か……………やっぱり昨日は少しやりすぎちゃったかなあ？」

私は体を起こして背伸びをした。

この背伸び、朝にやるとリアルに背が伸びるらしい。

「さて、さっさと着替えて朝ごはんを食べよう」と

私は寝巻を脱いで制服に着替える。

この制服可愛いからお気に入りなんだよね。

白のブラウスに青の襟のセーラー服と同じく青のスカートで赤いスカーフが女子の制服だ。

柩に見せて貰った男子の服は白のブラウスと黒の学ランだった。

「よし。着替え終了！！ 柩を起こしてから朝食だね」

私は柩の部屋へ向かった。

ピンポン

「柩、朝食を食べに行こーよ」

「慌てるなよ。もう少しで着替え終わるからな」

「はい」

私は柩の部屋の前に立って開くのを待つ。

「待たせたな。さ、朝飯行こうか」

「もう腹ぺこだよぉ」

私と柩は食堂へ行くために昇降機に乗り込んだ。

「ねえ、柩？」

「何だ？」

「朝ごはん食べたらさっさと学校行こうよ」

「別に構わないが……どうしてだ？」

「何となく」

「やっぱりか。……わかったよ。その気まぐれに付き合ってたやろ」

「わーい」

（よし！！ 柁捕獲！！）

私は心の中でそう叫んだ。

柁と一緒に登校が出来るからだ。

イチやついたりしたいなあ……………。

「それじゃ朝飯を食いにいくか」

「りょーかい」

私達は昇降機から降りて食堂に入った。

「朝はヘルシーな奴が良いなあ……」

「俺は和風定食で良いや」

私が悩んでる間に柊はメニューが決まった。

こうなったら……必殺の最終手段を……

（お子様ランチ……お子様ランチ……無い……だと？）

使えなかった。

「はあ……野菜定食にしよう」と

私もメニューが決まり、列に並ぶ。

「お、流音に柊じゃないか」

私の後ろに魔理沙が並んだ。

「おはよう」

「おはよー。魔理沙は何食べるの？」

「和風キノコ定食。ここのキノコ、結構美味いんだぜ」

「魔理沙ってキノコ好きなの？」

「ああ、好きだぜ」

「そっかーキノコかー。私の今日の夕飯はキノコにしようかな？」

「流音、順番だ」

「はい」

私は食堂の人に券を渡した。

そしてすこししたらに料理が出てくる。

「それじゃ魔理沙。また後でね」

「おう」

柩と二人っきりの食事……嬉しいなあ。

何度夢見た事か……！

「お待たせ」

私は席に座った。

「おう。それじゃ早速……」

「いただきます」

そして朝食を食べはじめた。

「なあ流音」

「何？」

「今何時だ？」

「7：30だね」

「なら少しだけ急いで食べるとしよう」

「なんで？」

「一応、少し早めに出たい。少しやりたい事がある」

やりたい事？

一体なんだろう……。

まあ枉の事だから危なくは無いよね。

「……わかった。良いよ」

「すまないな。合わせて貰って」

「大丈夫大丈夫。早く食べないと冷めちゃうからね」

「ああ、そうだな」

私と柁は改めて少し急ぎ目に食べ始めた。

始業式前夜&学校登校前（後書き）

ご意見、感想、その他諸々お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6698z/>

東方学園録 ～ここが幻想のフロンティア～

2012年1月9日21時52分発行